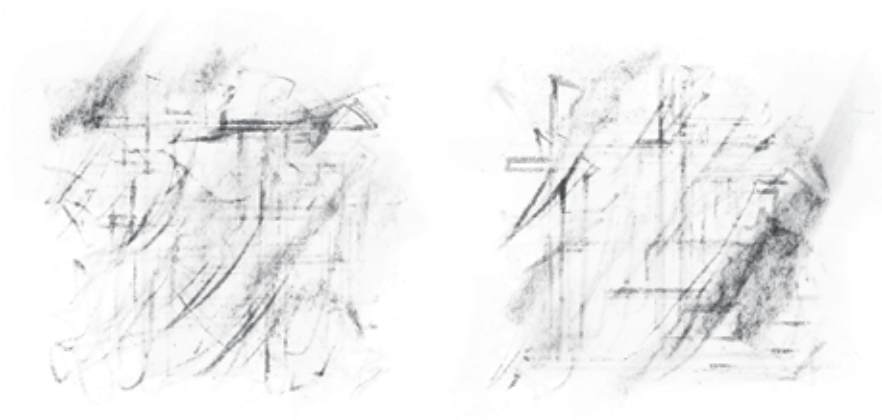


聴こえてくるのは、産声か音楽か。



する 音楽会

落合陽一 × 日本フィル VOL.4

録音する音楽会

2020 10.13 TUE 19:00 開演

東京芸術劇場 コンサートホール

計算機時代の赤子のような、分断されたオーケストラと新しいデジタルの地平

Reborn to Digital Nature

オーケストラが分断される。今までと同じ形を作れなくなる。メロディも、ハーモニーも、体験も、感覚も、分断された世界で今まで通りに味わうには難しい。

距離の制約を電子技術を経由して取り戻そうという動きがある。多くの試みが流刑状態にある人々を癒すために、空間を超えて行われている。不意に現れたデジタルの自然への橋梁を前にして、世界の手触りを失ってしまっていることに気がつく。世界が今や質量への憧憬の中にあり、その憧憬がもはや郷愁へと変わりつつある。この現状に我々は満足していない。

我々はこの時空間的な分断に対して、実験と共有の連続こそがこの新しいデジタルの地平に生まれ直した時代にとりうる、手立てだと真摯に考える。我々は身体性を切り離れたデジタルの地平で、オーケストラを聴くこと、見ること、共有することについて、実はまだ何も知らないことを、毎日明らかにしていくのだ。デジタルの地平から、改めてこの世界の触覚や調和を取り戻す作業は、世界を赤子が認識していく姿に似ている。初めてバイオリンを習ったときのあの窮屈さや、初めてピアノを褒められたあの奥ゆかしさに似ている。

繋がること、隣人を愛すること、夢を抱くこと、希望を持つこと、様々な大切さがある。我々はその中で、世界に生まれ落ちた赤子が、世界を触りながら愛していくように、オーケストラの原義に立ち戻りながら、デジタルの触覚や共有空間に対する想いを結実させていく。今我々が目指すのは、実験と共有の繰り返しからたどり着くはずの、名前のまだない、幼子の初めての発表会だ。

主催：文化庁、公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団

企画・制作：公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団

協力：Emohaus Inc、WOW、

TBWA\HAKUHODO(広報デザイン協力)、
MUSIC/SLASH(配信協力)、Google

機材協賛：アストロデザイン(株)、(株)ブリズム



文化庁委託事業「文化芸術収益力強化事業」

文化庁「文化芸術収益力強化事業」は、文化芸術団体の入場料収入のみに頼らない新たな収益確保・強化策を支援及び調査する事業です。本公演では、文化庁からの委託を受け、実際の演奏会のみならず、演奏会のデジタルコンテンツ化及び課金配信を通じ、新たな収益策を模索します。

感染防止にご協力をお願いいたします

- スタッフはマスクやフェイスシールドを着用します。また、小声で対応させていただきます。
- 入場時の手指消毒、手洗いをお願いいたします。
- ホール内ではマスクを着用し、周囲のお客様への配慮をお願いいたします。
- 開演前はお席でお過ごしください。また時差退場へのご協力をお願いいたします。
- ブラボー等掛け声はお控えください。ホール内では大声での会話を避けるようご協力をお願いいたします。
- 出演者へのプレゼント(お手紙・お花などを含む)、面会、楽屋入り待ち、出待ち等はご遠慮ください。
- チケットご購入者と演奏会ご来場者のお名前が異なる場合は、ご来場者のご住所、お名前、電話番号を弊団までお知らせください。
- 万が一感染者が発生した場合など、必要に応じて保健所等の公的機関へお客様のお名前と連絡先を提供する可能性があります。

ベートーヴェン：交響曲第7番 第4楽章 (1811)

Ludwig van BEETHOVEN: Symphony No.7, 4th movement

ハイドン：交響曲第45番《告別》第4楽章 (1772)

Franz Joseph HAYDN: Sinfonia No.45, "Abschied" 4th movement

ガブリエリ：ダブル・エコー効果の12声のカンツォン (1615)

Giovanni GABRIELI: Canzon in Echo Duodecimi Toni a 12

ペルト：フラトレス (1977/1991)

Arvo PÄRT: Fratres

藤倉大：Longing from afar (2020)

FUJIKURA Dai: Longing from afar

— 世界のオーケストラ・プレーヤーとともに —

休憩 intermission

ストラヴィンスキー：組曲《兵士の物語》(1918)

Igor STRAVINSKY: L'Histoire du soldat

演出・監修：落合陽一

指揮：海老原 光

ビジュアル演出：WOW

演奏：日本フィルハーモニー交響楽団

コンサートマスター：扇谷泰朋 [日本フィル・ソロ・コンサートマスター]

《兵士の物語》

ヴァイオリン：扇谷泰朋 コントラバス：高山智仁
 クラリネット：伊藤寛隆 ファゴット：鈴木一志
 トランペット：オッタビアーノ・クリストーフォリ トロンボーン：岸良開城
 打楽器：福島喜裕

お客様へのお願い

演奏中は、着信音、アラーム、バイブレーション等、音の出るものはお切りください。
 手荷物、傘、チラシ類などの物音や話し声で他のお客様のご迷惑にならないようご配慮をお願い申し上げます。
 録音、録画、写真撮影は禁止されております。



© 蛭川実花

演出・監修: **落合陽一** Director: OCHIAI Yoichi

メディアアーティスト。1987年生まれ。東京大学大学院学際情報学府博士課程修了(学際情報学府初の早期修了)、博士(学際情報学)。筑波大学デジタルネイチャー開発研究センター センター長、准教授・JST CREST xDiversityプロジェクト研究代表。

2015年 World Technology Award、2016年 PrixArs Electronica、EUより STARTS Prizeを受賞。Laval Virtual Awardを2017年まで4年連続5回受賞、2019年 SXSW Creative Experience ARROW Awards など多数受賞。近著として「デジタルネイチャー (PLANETS)」、「2030年の世界地図帳 (SBクリエイティブ)」、写真集「質量への憧憬 (amana)」。「物化する計算機自然と対峙し、質量と映像の間にある憧憬や情念を反芻する」をステートメントに、研究や芸術活動の枠を自由に越境し、探求と表現を継続している。



指揮: **海老原 光** Conductor: EBIHARA Hikaru

鹿児島生まれ。鹿児島ラ・サール中学校・高等学校、東京芸術大学を卒業、同大学院修了。その後、ハンガリー国立歌劇場にて研鑽を積む。2007年ロプロ・フォン・マタッチ国際指揮者コンクールで第3位を受賞。指揮を小林研一郎、高階正光、コヴァーチ・ヤーノシュの各氏に師事。2019年、九州シティフィルハーモニー室内合奏団首席指揮者に就任。これまでに、国内主要オーケストラを指揮し、好評を得ている。また、2012年、2015年にクロアチア放送交響楽団の定期公演(ザグレブ)に、2019年にはゲデレー交響楽団(ハンガリー)に客演し、現地で好評を博した。(オフィシャル・ホームページ <http://www.hikaru-ebihara.jp/>)

WOW

ビジュアル演出 **WOW**

Visual Performance: WOW

東京、仙台、ロンドン、サンフランシスコに拠点を置くビジュアルデザインスタジオ。CMやコンセプト映像など、広告における多様な映像表現から、さまざまな空間におけるインスタレーション映像演出、メーカーと共同で開発するユーザーインターフェイスのデザインまで、既存のメディアやカテゴリーにとらわれない、幅広いデザインワークをおこなっている。
(コーポレートサイト <https://www.w0w.co.jp/>)

Creative Director: 於保浩介 (OHO Kosuke)

Director: 近藤 樹 (KONDO Tatsuki)

Technical Director: 石鍋俊作 (ISHINABE Shunsaku)

Programmer: 中野雄太 (NAKANO Yuta) / 阿部啓太 (ABE Keita)

Visual Designer: 曾根宏暢 (SONE Hironobu) / 松永昂史 (MATSUNAGA Takafumi) / 石井智子 (ISHII Tomoko)

Producer: 萩原 豪 (HAGIWARA Go)

照明デザイン: 成瀬一裕

照明: ライティングカンパニーあかり組

撮影: 井村宣昭 (井村事務所)

録音: 塩澤利安 (日本コロムビア)

配信: MUSIC/SLASH

舞台監督: 井清俊博

音響コーディネーター: 高村弘幸 (アルファソリューション)

《___する音楽会》って??

宮本 明 (音楽ライター)

タイトルがいきなり伏せ字という、ちょっと人を食ったネーミング。印刷ミスではないのか!? といぶかった人もいるかもしれない。

メディアアーティスト落合陽一と日本フィルが2018年にスタートさせたこのプロジェクト。実施歴でもわかるように、キーワードとなるのは「耳で聴かない」——より正確には「耳だけで聴かない」だ。耳で音を聴くことを前提に成り立ってきた音楽を、聴覚に障害のある人々とも共有する挑戦。音楽を、映像を中心とするさまざまな形のメディアと交錯させ、変態させていく。400年の歴史を持つオーケストラ音楽は、耳と目と身体で受け止めるものとして、落合流に言えば「アップデート」されることになる。

「この世の中の、時間方向に広がったものはだいたい音楽だと思っている」と話す落合にとって、音楽をどのように表現しようとするのは、ごく自然な取り組みなのだろう。面白がって音楽で遊んでいたら、それが結果として聴覚ダイバーシティに結びついていた。そんな感じにも見える。

「面白がって遊んでいる」と書いたが、それを、訳知り顔の天才が勝手気ままに音楽をいじくっていると受け取ってほしくはない。8月に行なわれた発表会見でのひとコマ。出席したソロ・コンサートマスター扇谷泰朋が《兵士の物語》の一節を弾いた。

「生音、圧倒的にいいですね。最高!」

すぐ隣で演奏を聴いていた落合が興奮気味に叫んだビュアなひと声新鮮だった。彼が多くの人々と共有したいと考えている音楽の楽しみ方は、案外そんな根源的なところからスタートしているのだろう。とても信用できる、と思う。

そしてきっと、だから日本フィルは彼とがっぷり四つに組み、腰を据えて新しいチャレンジを継続しているのだ。実行面だけで想像しても、この公演に注がれたエネルギーはかなりのものだ。テレビに慣れたわたしたちは、映像だと、つつい空気のように当たり前に受け入れてしまいがちだけれど、ここにはオペラ1本を上演するのに匹敵する労力が費やされているといえる。その価値があるのは、落合と日本フィルが音楽へのアプリアリナリスペクトで結ばれているからこそ。知恵と勇気と覚悟をもって、彼らは音楽だけをぶれずに見つめているはずだ。

さて、シリーズ最新作の今回は当初、電気楽器や電子音楽をテーマにオーケストラと向き合う構想だった。しかしそれは変更を余儀なくされる。オーケストラは数か月にわたって、その成立の根幹ともいべき、多数の奏者が密な空間に濃厚に集合する機会さえ奪われたのだ。

ではどうするか。その試行錯誤をそのままタイトルにしたのがこの奇抜なタイトルなのだろう。つまり、考え中。これからの2時間は、その答えを探るわたしたち自身の物語でもある。

公演はオンラインで同時配信される。その配信映像には、会場で体験するのと同等の、しかし別の面白い仕掛けが施されるという。だからじつは《___する音楽会》は、ライブと配信の両方を体験して初めて完結するのだともいえる。音楽の生演奏と同じ「1回性」にこだわるがゆえに、繰り返し視聴できるアーカイブ配信はないのだが、さいわい10/24に1度だけ再配信が行なわれる※。《___する音楽会》をコンプリートするチャンスがあるのは、いま会場でこれを読んでいるみなさんだけだ。

※P.8参照

予期せぬコロナ禍が全世界に多大な影響を及ぼす2020年。感染防止の視点のもと、オーケストラも音楽以外の部分で変化と対応を余儀なくされた。

しかし、クラシック音楽の演奏様式や作曲技法は、まさに時代のさまざまな条件やニーズによって柔軟に変化・対応していったものであり、今回の取組みは現代のわたしたちが演奏するうえで、あらためて初心に返るような新しい気づきに満ちていた。

今回のプログラムは、コロナ禍の“今”しか得られない視点といえる、演奏する上での“密と疎”“ミュージシャン間のディスタンス”にフォーカスされたものとなった。

17世紀、18世紀、19世紀、20世紀、21世紀の作品がそれぞれ並んだのも、全体を俯瞰する上でたいへん興味深い。

500年の時を貫いて流れるクラシック音楽の魅力を、赤子に戻って体感できる、まことに興味深い曲の数々をお楽しみいただく。

ベートーヴェン：交響曲第7番 第4楽章

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)は、古典派の伝統をさらに発展させ、音楽の中に大胆にはっきりと自己の主張や思想を取り入れた作曲家である。耳の病のため30代に完全に聴覚を失うなど、大きな悩みを抱えつつも、近代化へ向かう激動の時代の中で貴族の雇用人としてではなくビジネスマンとしてふるまい、主体的な音楽活動を行った。

この「交響曲第7番」は1813年のウィーンで初演され、聴衆から熱狂的に迎えられて大成功を収めた。彼はまさに当時の流行作曲家としての地位を築き上げ、さらには19世紀の、とりわけドイツ作曲家の規範となったのである。

曲は堅牢な構成によって緻密に練り上げられ、古典的な楽器編成が確立されている。この最終楽章は、密集したオーケストラによる力強い推進力に満ち、人間の心臓の鼓動のようなビートを根底にして、生命力に満ちた作品として結実している。

ハイドン：交響曲第45番《告別》 第4楽章

ベートーヴェンから遡ること約50年前に生まれ、18世紀ウィーン古典派を代表する作曲家がヨーゼフ・ハイドン(1732-1809)である。

困窮の下積み時代を経てハンガリーの大貴族・エステルハージ侯の宮廷楽長となったハイドンは、音楽好きの君主の絶大な信頼を得、30年間にわたりその才能を発揮することができた。この《告別》には、有名な逸話がある。楽団員の“ある訴え”を、ハイドンは第4楽章の“あるパフォーマンス”にこめた。エステルハージ侯はその意図をまがいがなく察知し、訴えは聞き届けられた…というものである。フランス革命以前の主従関係ではあるが、そこには人と人との深い敬愛があった。

ガブリエリ：ダブル・エコー効果の12声のカンツォン

17世紀、ヴェネツィアのサンマルコ寺院に天上の調べを響かせたジョバンニ・ガブリエリ(1554または1557-1612)は、多ジャンルにわたる卓越した作曲技法で、ヨーロッパ各国の音楽家の憧れの的となり、

当時もっとも影響力をもった音楽家であった。サンマルコ寺院の特徴である、オルガンの両翼に対向する聖歌隊席や信徒席後方にディスタンスをとって配置された合唱・合奏隊が、絶妙な空間効果で重なり、交わしあい、教会ならではの長い残響を伴って人々の頭上を駆け巡る。それはめくるめく擬似天上体験だったことだろう。ディスタンスをとればとるほど神秘的な効果が生まれるこの希有な作品は、強制的にディスタンスをとって演奏せざるを得ない2020年のわたしたちに400年の時空を超えて、音楽の自由さを雄弁に語りかけてくる。

ペルト：フラトレス

エストニア出身の作曲家アルヴォ・ペルト(1935～)は、現代を生きる作曲家として、ひじょうに多くの聴衆を獲得している作曲家である。シンプルな響きを主体とした静謐な作風は、昨今の“癒しの音楽”ブームともあいまって現代人に広く支持され、実演される作品も多い。《フラトレス》とは、信仰を同じくする仲間＝「兄弟」をさす。なおペルト自身の手によって、多くの編曲版がつくられており、作曲家にとって愛着のある作品であることがうかがえる。曲の主な要素は、持続する空虚五度の和音、そして聖歌のような主題の反復である。似たようなメロディーが何度もくり返されるが、ミニマルミュージックのような軽やかさはない。ここで表現されている神秘的で宗教的な響きは、まさにペルトの独自の境地だと言ってよいだろう。

藤倉 大：Longing from afar

1977年大阪生まれの藤倉大は、現在、世界でもっとも注目される作曲家の一人と言って過言ではないだろう。昨年は映画《蜜蜂と遠雷》の音楽を手掛け、一般の方の耳にも広く知られる存在となった。

このLonging from afarは、コロナの時代にテレワークで演奏するために作曲された、まさに時代の申し子と言える作品である。本人からメッセージが届いている。(P.8へ)

ストラヴィンスキー：組曲《兵士の物語》

どの時代にも“最新の音楽”が存在する。今から約100年前、イーゴリ・ストラヴィンスキー(1882-1971)は現代作曲家として鮮烈な存在感を示した。バレエ界の異能ディアギレフ率いるバレエ・リュスのために書かれたバレエ作品は、今でこそ20世紀近代音楽の傑作としてのゆるぎない地位を占めているが、当時は聴衆に受け入れられずキャンダラスな大騒動を巻き起こし、その評価はさながら炎上の様を呈した。

そんな彼が新古典主義への移行を示した重要作である音楽劇《兵士の物語》は「読まれ、演じられ、踊られる」と附記されている(後に作曲家自身により“組曲”として整えられた。)。ロシアの民話のもとになっているが、その背景には第1次世界大戦による全世界的な閉塞感、疲弊した社会や経済の影が色濃く落ちている。発表された1918年は、スペイン風邪も世界中に猛威をふるっていた頃なのだ。才能にあふれ多彩な作曲法を駆使したストラヴィンスキーが、そのアンテナに触れる現代を映す鏡として作品を生み出していったのだとしたら、2020年のコロナ禍、どのような音楽を生み出したのだろうか。興味は尽きない。

1. 兵士の行進曲
2. 兵士のヴァイオリン
3. パストラール
4. 王の行進曲
5. 小コンサート
6. 3つの舞曲(タンゴ・ワルツ・ラグタイム)
7. 悪魔の踊り
8. コラール
9. 悪魔の勝利の行進曲

Longing from afar -for to be tele-performedについて

藤倉 大

曲目について

この作品は、かっちり書かれていない、どの楽器、どの声で演奏しても良い、曲の長さも自由という作品です。「テレワークでみんなで演奏できるような曲作ってよ」と友人の指揮者、山田和樹さん（日本フィル正指揮者）に言われて作ってみました。よって、テレワークで演奏できるようにデザインされています。

Covid-19のパンデミックの影響によるソーシャル・ディスタンスの状況で、僕たち音楽家が物理的に離れていても、一緒に音を出し新しい音楽を作る方法は無いだろうか、と考えました。ロックダウンのお陰で、一緒に演奏できない、アマチュア、学生、大スター演奏家が皆それぞれの家にいるこの状況は独特です。

音を出さない指揮者も誰も指揮をできずに、家にいます。

各国のリーダーが毎日大きな決断を迫られています。それぞれのリーダーの決断によりこの期間中に何人の人々が死ぬか、それとも救えるかが決まる。

この作品は、他の多くのオープンスコア作品とは異なり、リーダー／指揮者が一緒に演奏する人たちと話し合っ、音楽をデザインできるように作られています。

(2020年4月筆)

《___する音楽会》での演奏に寄せて

ロックダウン中に書いたこの作品。もちろんリモート演奏でできる作品を、と考えていたが、僕は生演奏でソーシャルディスタンスでも演奏できる作品になればいいなとも企んでいた。もちろん書いた4月下旬は奏者が集まる、なんて夢のまた夢だったけれど。

もうこの作品は12団体がリモートで演奏し映像に編集して発表している。

僕はもう何年もいろんな人から「落合陽一さん知ってる？ 藤倉さんと絶対面白いことできるよ!」と言われてる。でも有名な人にこちらからアプローチするのは恥ずかしいな、と思いながら落合さんの本は日頃からかなり読んでいた。

そんな中、海老原光さんと日本フィル（こちらも初めてのコラボ）からこのプロジェクトのお話をいただき、僕はとっても嬉しかった。

僕がディレクターを務めるボンクリフェスでもこの作品は生演奏し、僕はロンドンからキーボードをリモートで演奏し参加した。今回のこのプロジェクトは、実際マイクを通してのリアルタイムのリモート演奏と、実際の生演奏のハイブリッドのアンサンブルだ、と聞く。メロディーを加えたバージョン5の楽譜をこのプロジェクトのために提供した。

面白いことになるのは間違いない。

ロックダウン生活の中で一番良かった出来事になるかもしれない。

(2020年9月筆)

【オンライン再配信】

10月24日(土) 19:00 (購入は10/17 18:00まで)

6,000円(税込) <https://eplus.jp/musicslash1024/>

※アーカイブ(追っかけ)再生はできません



耳で聴かない音楽会
SOUND-FREE CONCERT

(拍手)
ORCHESRA JACKETを着ていろんな感じて、SOUND HUGを抱えて、今日感じて音楽を楽しんでいただきました。

最後はもう一度、音楽と一緒に体を動かうか。
よろしいですか？

♪～ (演奏)



落合陽一×日本フィルプロジェクトの演奏会が以下の賞を受賞しました。

カンヌライオンズ2019

☆ ミュージック部門 (「エンターテインメントライオンズ・フォー・ミュージック」) ブロンズ受賞

☆ SDG部門 (「サステイナブル・デベロップメント・ゴール」) ショートリスト入選

第72回広告電通賞

☆ イノベティブ・アプローチ部門の最高賞および特別賞

日本マーケティング大賞

☆ 奨励賞

第5回JACEイベントアワード

☆ 優秀賞 (音感アップデート賞)

日本空間デザイン賞2019

☆ BEST 100 エンターテインメント&クリエイティブ・アート空間

第23回文化庁メディア芸術祭

☆ 審査委員会推薦作品

アルスエレクトロニカ・フェスティヴァル2020 "TOKYO GARDEN" 出展



写真: 山口敦 (VOL.1 耳で聴かない音楽会 / VOL.2 変態する音楽会 / VOL.3 耳で聴かない音楽会2019)、平舘平 (VOL.3 交錯する音楽会※)

クラウドファンディング Readyfor からご支援を頂いた皆様 (敬称略、順不同)

石倉洋子 Naoko Takahashi	筋野めぐみ Chikako Saito	KIYOKO Kiko Imase	SUZUKIRYUJI 岩崎努 Nozaki yuon	酒井素子 多根由希絵 皆川尚哉 和田俊輔
大脇美都子 青木 裕一 谷口 浩和 鈴木 貴哉	原田佑香 Chubachi 松井俊子 藤村宏樹 まめ 河野彩子	大内洋 高橋治子 山谷崇夫 加藤寛聡 大谷 景子 山本 英作 角和麻衣子 mami yamasaki	横田裕市 Kei Yamawaki 田中 ヒデト @wa__xt30 shin	横山康平 松田和晋 柴山 渚 森井由美 タカツマサノリ 佐々木 健太郎 大口 貴正 清水千佳 村上 ゆうこ 大山 曜 Alex Yuki Waxman
月原昌子 曾我健二郎 cheri 三宅正哲 Mami Sakoda NORIKO KUJIRAOKA やまうちまきこ Akemi Shirakura みかち 高木謙二 鈴木祐介 戸部渉 庵雅美 WiTH PAiN みおしん えみこ 梅津 章一 氏家海斗 Hatano Rina 鈴木春香 Setsuya Kurotaki かし 小曾戸卓行 村田潤一郎 野口ワタル 伊藤知晃 川合祐子 日良夕貴 川西英明 Ryuji Miyouchi atmsphrca 松島恵美 中山慎也 azukinohiroki 阿部修英 立川裕也 大津 良裕 秋葉芳江 村田有生喜 奥田将史 山本 尚幸 yrinta 木村真理子 白熊可奈 ナカヤマケンジロウ 井上 航一 Yuko Kaneko 服部有樹 帖佐真之介 タナカヤスコ 高松健人 吉田恵二郎 あや@aya_aya 佐藤大輔 藤澤 昌和	中山景 志村 綾野 Akira Kudochi 天使弾道ミサイル 近森淳平 人見健三郎 田中絵里 Hiroki Arai 高村慶太 山本修史 早川智子 鈴木駿太 塚越かほり Takuya Okada 柳原大地 養手智紀 三宅 竜太郎 AI SASAKI Atsushi S TAKA AKI GOTO umehiroyuki nahomiyashita 浦野ちなみ 築地泰一 千紘 谷村慎子 小野澤由貴 新居明博、新居幹江 大宮舞 倉嶋 雄飛 井上友博 星 ふき子 高橋宏明 木村健二 小泉 香織 すがわら 藤原紘子 杉崎 優子 榊みや子・井坂光孝 SakuRa Sayaka 不可三 玲子 村上彩香 宮島康孝 海道 貴志 相田万実子 小川典良 佐藤 賢弘 def Chiaki_Doi() 金谷道雄 鬼木利瑛 神藤 駿介	岡田芳恵 沢庵 金内拓海 中西可奈 岩田武宏 林 英樹 中嶋一統 三宅善子 岡崎仁 中野 翔太 きいくんママ 芥川美穂 Mitsuyo Seki 中山利文 Kona 岡部和義 斉藤滋 吉村悠希 Zakky 勝又智子 奥山雄太 渡辺勉 がねこまさし 松山幸世 MIWAKO KAMATANI 岩間 清大朗 MIKA NOW hair/make 樽瀬 高志 松田 知子 Yuka Sato 饒波明奈 やまうち みゆき 高畑賢一朗 pontatohacchon 高橋綾 富田さつき 柴田綾香 ひろひろろ 新井陽子 岡田邦夫 五木田洋平 横田あすか 岡澤優太 坂本尚史 玉田 大 藤 亮 大津 良裕 佐橋 五十嵐 正真	成田智哉 堀川理恵 星野由紀子 渡部菜穂子 ウクリナ 吉岡謙志 杉浦直人 森 晴紀 樋口 明日香 Kazuhide Ryuno 井上悦子 柴山喜理子 馬場貴光 T.S. 富塚 崇 石井祐晃 高野昂平 榛葉成倫 Eriko Matsuyama 清水裕美子 藤村ジョナサン元氣 川崎 亮 江崎康子 赤木 公誠 角野隼斗 yuko 藤原豪 博多努 西井カツユキ Toshi Yabu 小林大悟 石山アンジュ 福本英太 山本将徳 Shuhei Maeta 辻昭博 平田 憲穂 リュウ つんぐに 松尾 一輝 外館健人 中尾俊樹 水野充恵 笹木 史比古 Jun Takahashi 宗 神子 とごよけんた 司法書士法人equal馬場真作 田中信次/明子/達之信/寛二 【Gifu Film】 Keita Kouketsu	奥村治彦 松井優希 大森 千春 佐野 岳史 重本玲奈 神田優介 壺ネコ 二瓶真衣 田中Jr araaakiii2020 平川陽一 衣笠雅子 南部玲子 Atsuki.T 神田真理子 高橋 佑 吉村由宇 柳瀬楓 小宮山 洋介 たぬましのぶ 奥村 隆史 mika todaka 西澤篤央 村田陵河 Yuki Hasegawa 小須田貴久 松村 広則 日浦溪心 水野裕子 鎌苅洋志 高橋マミ 木村美咲 橋本梓龍 佐野亮

匿名96名



公益財団法人 日本フィルハーモニー交響楽団

1956年創立。創立指揮者渡邊曉雄。60年を超える歴史と伝統を守りつつ、さらなる発展を目指し、「オーケストラ・コンサート」、「リージョナル・アクティビティ」、「エデュケーション・プログラム」という三つの柱で活動を行っている。首席指揮者ピエタリ・インキネン、桂冠指揮者兼芸術顧問アレクサンドル・ラザレフ、桂冠名誉指揮者小林研一郎、正指揮者山田和樹という充実した指揮者陣を中心に演奏会を行い、「音楽を通して文化を発信」している。2011年4月より、東日本大震災の被災地支援活動「被災地に音楽を」を開始。2020年8月末までに297公演を数え、現在も継続している。BS朝日毎週水曜夜『Welcome クラシック』出演中。

(オフィシャル・ウェブサイト <https://www.japanphil.or.jp>)

- 創立指揮者／渡邊曉雄
- 首席指揮者／ピエタリ・インキネン
- 桂冠名誉指揮者／小林研一郎
- 桂冠指揮者兼芸術顧問／アレクサンドル・ラザレフ
- 名誉指揮者／ルカーチ・エルヴィン
- 正指揮者／山田和樹
- 名誉指揮者／ジェームズ・ロッドマン
- 客員首席指揮者／ネーメ・ヤルヴィ

ソロコンサートマスター 木野雅之 扇谷泰朋	ヴァイオリン 小俣由佳 小中澤基道 児仁井かおり 高橋智史 中川裕美子 中溝とも子 松澤雅奈 デイヴィッド・メイソン	オーボエ 佐竹真登 ◎杉原由希子 ○松岡裕雅 クラリネット ◎伊藤寛隆 楠木 慶 照沼夢輝 堂面宏起	トロンボーン 伊波 睦 ○岸良開城 バス・トロンボーン 中根幹太 テューバ 柳生和大 ティンパニ ◎エリック・パケラ	理事長(代表理事) 平井俊邦 副理事長(代表理事) 五味康昌 常務理事(代表理事) 後藤朋俊 常務理事(代表理事) 中根幹太 理事 石井啓一郎 遠藤 滋 島田敏生 田村浩章 徳田俊一 戸所邦弘 福本ともみ 評議員会会長 加藤丈夫 評議員 青井 浩 荒蒔康一郎 石塚邦雄 石村 等 内川清雄 海堀周造 梶浦卓一 河北博文 喜多崇介 木村恵司 久保田 隆 小林研一郎 佐々木経世 島田精一 高橋和夫 津田義久 野間省伸 堀越作治 山口多賀幸	監事 上條貞夫 名誉顧問 熊谷直彦 島田晴雄 田邊 稔 アドバイザリー・ボード 大島 剛 小野敏夫 小網忠明 後藤 茂 武田隆男 田邊 稔 松本冠也 溝口文雄 コミュニケーション・ディレクター マイケル・スペンサー マネジメント・スタッフ 磯部一史 井原由紀 江原陽子 及川ひろか 小川紗智子 賀澤美和 柏熊由紀子 川口和宏 佐々木文雄 佐藤孝雄 澤田智夫 杉山綾子 高橋勇人 田中正彦 樋谷祐子 中村沙緒里 長谷川珠子 馬場桃子 兵 優子 藤田千明 別府一樹 益満行裕 山岸淳子 吉岡浩子	団友 青柳哲夫 青山 均 赤堀泰江 浅井俊雄 浅見浩司 新井豊治 石井啓一郎 江藤 隼子 遠藤 功 大石 修 大川内 弘 大味 修 寛 美知子 金本順子 蒲谷隆行 菊田秋一 吉川利幸 小林俊夫 小山 清 斎藤千種 佐藤玲子 高木裕子 高木雄司 高木 洋 高倉理実 立川和男 葛井康三郎 堂阪俊子 富樫尚代 豊田尚生 中川二郎 永田健一 中務幸彦 奈切敏郎 畑井紀代子 平賀法子 松本克巳 松本伸二 三谷昭平 三本克郎 宮武良平 三好明子 森 茂 山下進三 山科淑子 山本辰夫 渡辺哲雄
-----------------------------	--	--	--	---	--	---

◎ 首席奏者
○ 副首席奏者
☆ 客演首席奏者

(2020年10月1日現在)

落合陽一×日本フィルハーモニー交響楽団プロジェクトVOL.4にご協力頂いた方々

● TBWA/HAKUHODO

宇佐美雅俊(コピーライター)、伊藤裕平(アートディレクター)、畑尾佐助(デザイナー)、戸矢渚(デザイナー)、北田佑佑(フィルムディレクター)、阪元裕樹(フィルムプロデューサー)

● READYFOR

廣安ゆきみ(キュレーター)、小柳聡美(キュレーター)
※プロジェクトページは終了後もご覧いただけます。

<https://readyfor.jp/projects/vol4>



【問】 あなたの思う演奏会のタイトルは？

--	--	--	--

する
音楽会

人、音楽、自然——日本フィルのテーマです。